
黒いりんご

Y.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒いりんご

【Nコード】

N5415A

【作者名】

Y・

【あらすじ】

自分より下ラインの男が一番上ラインまで登りつめられ、複雑な心情の主人公。

NO.1

か

宇宙にふけが散らばった

焦点は爪

背景に理科の教科書

紙切れに広がる宇宙で俺のふけは輝いた。

四角に入りこんで

また四角の机に向かう

四角四角四角

だけど丸より四角が好き

角に隠れる事ができる

嫌なことは角に隠せばいい

教室の中はまばたきの音すらきこえそうなくらい静かだ。

周りを見渡せば、上目使いで黒板を見上げ、ノートにコピーするやつらばっか。

コピーはしない。意味を分かってない俺にとってかなりすごいらしい法則もただの文字の集まりでしかなかった。

風が教室にからみつく。

窓際のヤツらはうつとうしそくにカーテンをはらっていて、その表情を横目でチラチラみながら笑いをこらえていた。口角がぴくぴくする。

その表情を見られまいと気怠そうに頭をかいた。

花粉配達。
大量入荷。

くしゃみを我慢したらしきヤツが普通より情けない音を口から吐き出す。その後に耳まで赤くして、くしゃみを押さえた掌をさりげなく制服にこすりつける仕草がさらに口角を震えさせた。

笑いの玉が

チャックでふさいだ俺の口から勢いよく飛び出そうとする。その勢いといったら、電子レンジであたため過ぎたラップつきの惣菜が音をたてて破裂するくらいの勢いだ。

笑ったらダメ。

視線がいつきに俺にまわる。

人の視線はキライだ。

口と違ってせりふがないから

とことん馬鹿にしても気付かれない。

俺はきつとうんと馬鹿にされている。

ヤツらの瞳の中で。

ださい。

きもい。

何が悪い？

19度の春が体に巻き付く。まだ染み一つない、角ばったブレザー

の中にはまりきった俺はカーテンの隙間からのスポットライトを浴びていた。キラキラなほこり。俺はなるべく息を止めていた。

黄色がよく目につく。風は冷たい。熱くなった体を操作して外へでるととても気持ちいい。そう、真夏に冷凍庫を開けたときにくるひんやりした空気の感じ。

とにかく春。

寝癖すらつけない新学期。

高校一年。

春休みは何度も高校の事を考えた。きっと何かがかわると思っていた。

鏡に映る新しい制服を着た自分はただ、衣裳をかえただけの着せ替え人形にすぎなかった。

そりゃそうだ。

髪型も中学と同じ伸びるだけ伸びた緑に近い黒髪は、自然に斜め分けになっていて、細長い逆三角の顔に斜め分けの前髪、緑に近い黒髪と言ったら、制服のきつちりとしめたネクタイが恐いくらいはまっていた。

顔のパーツも何一つ変わっていない。

奥二重の目蓋が、入学式の前日に慣れない手つきで毛抜きをもって一本一本の痛みに耐えながら抜いた眉毛が、不揃いに生えはじめてきて、青くなっていた。高すぎるくらいの鼻は、父親譲りで、出張った鼻瘤を触る度、小さくため息をついた。

男にしては赤い唇が色白の顔の中で一際浮いていて、常に唇を噛み締めるのがクセになっているほどだ。

無駄に伸びた身長は、ごぼうみたいにひよろひよろで、かつこつくて長いぐらいのズボンを買った俺だけど、ひきずるのが邪魔くさくて母親にすそあげしてもらった。足を曲げたときに見える白い靴下にはもう慣れてる。中学からの事だから。普通に考えたら変わるはずもないのに俺は高校でのもう一人の自分に期待していたのだ。

ノートもとらず、ひたすら爪を見ている俺に気付いた教師は、
「やる気がないなら出ていけ」
と俺に浴びるスポットライトを断ちぎった。
キラキラほこりのトーンを背景にした教師の顔はいつもよりリアルでその表情に少し顔がこわばった。

おまけに俺にはスポットライトじゃなくクラス中のヤツらの視線を浴びた。

黒い丸。

鏡より恐い。

街のショウウィンドウより恐い

一番リアルな俺を映すから

その黒丸に映る俺は

佐伯勇治じゃなく

同じクラスのきもいやツだろう。だけど彼らにとって俺をきもいやツとして映すのは、りんごを赤く映すくらい当たり前でごく普通な事なんだろう。

仕方がない。

いまさらりんごは黒くなれない。

これからの授業は真面目にノートをとろう。

チャイムの音と同時に教科書がたたまれる。まだ話がつづいているにもかかわらず、教科書やノートはすでに机の中へと押し込まれた。ルーズリーフを使う俺は、いちいちファイルに挟むのが面倒くさく、ばらばらに入ったルーズリーフはくしゃくしゃと耳障りな音をたてて、奥へ奥へ掃除機のごみ袋みたいに小さく押し込まれていく。

その奥へたまったルーズリーフのほとんどは、教師の視線を感じるときだけコピーした飛び飛びの単語や説明文。
白米のうえにふりかけられた黒胡麻みたいにはらばらと文字がちらばっていた。

休み時間。

前の席の小谷幸弘が首だけひねって、いまだき珍しい丸眼鏡の奥で細い目を俺な向けて、口だけで笑った。

「目えつけられたね、佐伯くん」

口の筋肉だけ上げた不自然な笑いは不気味だった。

こいつの目にこそ、俺はどういうふうに映っているか謎だった。

まわりのヤツらとは違う見方をしているような気がしていたんだ。

それはなんでかって

よくわからないけど、細い目だから読めないのか、丸縁眼鏡だからか、

何かしら俺につきまとってくるからか
たぶん最後のが一番答えに近いと思う。

もとわといえはこいつのせいだった。

高校が始まって3日目くらいの日だったか

大雨

強風

しみ込む雨に足の指がふやけて

靴下の生地との間に雨水がまとわりついて、歩く度に雨水を温めた。生温くなった靴の中を泳ぐ足をあざ笑うかのように、また避けて通れない水溜まりが道をふさぐ。

濡れたからにはもうどうでもいい。

靴が水溜まりにつくなり、ひんやりとした雨水が入りこんで、さらに靴下はぼちゃぼちゃになった。

あまりに強い風は、右半分の髪を根こそぎさらっていきそうなくらいで、もはや傘は雨に濡れないようにするよりも、風よけのように風の吹く方向に傘をむけて、盾のように扱った。

20分ほどの登校距離は軽く障害物競争よりやっかいだった。みぞに流れる雨水はすごい勢いで流れていて、茶色く染まった水は、なぜか恐ろしかった。

全くおしゃれ気のない俺が高校では中学みたいに地味でださいヤツに思われたくないと初めて使ったヘアワックスもすっかり落ちて、もとのぼさぼさ頭に戻っていくのがわかった。

初めて使ったワックスの感想はべたべたして気持ち悪かったせい、か、この日以来ワックスは使っていない。いや、ワックスを使う意味がなくなったのほうが正しい。

学校まであとわずかというときに俺の傘は風に逆らえず、裏返ってしまった。チューリップのようになった傘はどうしようもなくまわりの視線が恥ずかしかった。そのときに、小谷幸弘は俺に話しかけてきた。

「傘、ひっくり返っちゃったね。僕の傘入れてあげるよ。」

こいつの第一印象は、どっかの番組にできそうな、オタク少年そのものだった。丸縁眼鏡が雨でくもって、こいつは俺の事が本当に見えてんのかと思った。大体こんなオタク少年と相合傘できるかって思ってた俺は丁寧に断った。

「や…いいよ！もう濡れてるしさ」

チューリップを力づくで戻して、折れまくった傘を再びさした。

「遠慮しないでよ。ほら。おいでって。」

眼鏡をくもらせて、手招きする姿はどっからどうみても変質者そのものだった。俺は気味が悪いヤツに絡まれたなと眉をしかめた。

「まぢいいから！」

そう言って、ぼちゃぼちゃいう靴を走らせた。

「気使うなっ」

後ろから走って追い掛けてくる小谷は幼い頃よく見た幽霊に追い掛けられる夢よりはるかに恐ろしかった。三年や二年の先輩の目がない。あきらかに先輩らしい着くずした制服は、その制服の着方だけで、恐い先輩に見えてしまう。こんな馬鹿げたシーンを見られるなんて最悪な出だしだと心にまで雨水が浸水した。

追われるくらいなら、止まったほうが楽だという事に気付き、追い付かれる前に止まった。びしょ濡れの髪をかきあげたら、透明な空気に雲を作る機械みたいにつぎつぎに白色が溶けこんだ。

腰をまげて、膝に手をつく俺の上には小学生がさすような真っ黄色の傘が俺の空となっていた。

「逃げる事ないのに。学校まで一緒に傘入って行こうよ。」

目を宙に浮かべて、小谷の顔を見ると、やっぱり眼鏡はくもったまま、にっこり笑っていたから、このとき気持ち悪いけど案外いいヤツかもしれないと思った。笑っていると勘違いしていた。実際は頬の筋肉を持ち上げているだけなのに。人は目がなきやわからない。その人の目にその人が映るんだ。

俺は小谷と相合傘をしながら、残りの距離を登校した。思いっきり背中に刺さる視線に俺はつい背中をまるめてしまった。馬鹿でかい声に苛立ちながらもそれをかき消すくらいの雨がちょうどよかった。

学校について靴を脱いだら、さないたに靴下の跡がしみこんだ。木の湿った匂いが鼻に流れ込んで、雨を吸い込んで重くなった靴をくつばこに差し込んだ。

靴下を脱ごうか迷ったけどしょっぱなカラ裸足でいるのもどうかと思っ、なるべく板で水気をとってスリッパをはいた。かばんをせおいなおして、教室へ向かおうとすると、ぱたぱた後ろから小谷がついてくる。俺が止まってふりむけば小谷も止まり、ストーカーした事あるんじゃないかと本気で思うくらい慣れた足取りだった。

俺はまた逃げるように階段をかけあがり、自分のクラスにかけこん

だ。だけどそいつも俺と同じクラスへ駆け込んできた。俺の席の前に座るからどこまでいかれたヤツかと思ったけど、後ろ姿をよく見たらそいつは俺と同じクラスで、名簿も一つ前のヤツだった。こんな濃いキャラのヤツを見落とすなんていかに自分が緊張していたかがわかった。

ふとまわりを見渡すと、俺はかなり注目を浴びている事に気付いた。目が合ったヤツはひそひそと話したり、小さく笑ったりする。なんか、慣れないクラスに俺の悪口を通して一体感を作り出している感じがした。

俺はすぐに笑われている理由がわかった。そんなの俺がどこからどうみてもオタク少年の小谷と登校してきた事だろう。俺は運が悪かった。いくらひねり出してもすぐに尽きてしまう新学期の会話に男同士が相合傘で登校なんてもってこいの話題だろう。

俺が恥をかく分だけ、クラスのヤツらは仲良くなるってか。小谷のびしょ濡れのブレザーを見ながらため息をついた。

NO・2

新学期というものはなぜだか普通の日の何倍ものカロリーを消費していると思う。

今俺は、きつと校庭を3、4周走ったときくらいカロリーを消費しているだろう。その原因にあたる小谷は何くわぬ顔で俺に話し掛けてきている。

「目えつけられたね。佐伯くん。」

最近ではこいつの丸縁眼鏡をとんかちですたずたに砕いてやりたい衝動にかかれる。

こいつに悪気はないのだろうけど、口だけの笑いに盛り付けることは、どんなことばでも嫌味に聞こえてしまう。

「うつせえよ。」

俺は、斜め前に座るヤツのスリッパを脱いだり履いたりする足のしぐさを見ながら言った。

こいつといるとやかいだ。俺は少なくともここまで気持ち悪くはないと思う。こんなヤツと仲良しというレッテルをはられたら、俺に待っているのは、使え使えと迫ってくるとんかちと、きもい二人組というどうにもかばいようのないユニット名だけだ。

「冷たいよね。僕の事キライでしょ？」

俺はちらつと小谷に目をやった。相変わらず口だけ笑っていて、その顔にいいかげん呆れた俺は無視して次の授業の用意をロッカーに取りに行った。

ロッカーは廊下にある。14番の俺は六人づつ縦ならびの座席では前から二番目だから、教卓の後ろを通って廊下に出る。視線が気になるけど、後ろまでわざわざ回るほうが机に座るヤツらに対して向

かい合いになるから、俺は教卓の後ろを選ぶ。

教卓の後ろを通る時、なぜかクラス中のヤツらから痛いくらい視線を感じている気がする。なんというか、しずまりかえったクラスの前で一人スピーチをする時みたい。俺は廊下に出てロッカーから次の授業の用意を取りにくってだけの事に手にへんな汗を握る。誰も俺なんか見ていないだろうけど、俺の中に出来上がっている四角の中に並ぶクラスのヤツらが俺をじっと見ているんだ。

廊下に出ると、派手な女子グループがチンパンジーみたいに手を叩きながら大笑いしている。俺はこういう女が一番苦手だった。俺はこつという女達にとって笑いのネタでしかない。俺の話題でこんなふうに手を叩きながら笑う姿を何度を横目で見てきた。

地味グループの男子と話している時に耳に入ってくる佐伯と言えばさあゝのもろ作りものの声。

自分の名前が聞こえる耳がもう一つあるんじゃないかと思うくらい佐伯という固有名詞は盛り上がる俺たちの声の中でもすんなり入ってくる。

その時俺は片耳で友達の話聞きながら片耳で自分の事を笑う女達の悲鳴に近い笑いを聞いていた。

ここで元気をなくしたら、本当はうつすら気付いているかもしれない友達と、げらげらうるさい女達にへこんでいる姿を見られたくないと思い、大きな声で友達の話に加わった。自分が何を言っているのか解らなかった。自分を隠すのに必死だったんだ。

こんな思いは二度とたくない。

教室に戻り、席に着いたら、小谷が今度は腰からひねってこっちを向いた。

「ねえねえ。一緒に同好会作らない？」

「はあ？」

俺は普通のことばとしてじゃなく、『小谷が言ったことば』に対して

「はあ？」

ということばを選んだ。いや、違うな。ガチャガチャみたいに選ぶ事もできず、このことばがでてきたんだ。

たぶん俺は小谷を差別している。俺もクラスのヤツらと同じように小谷をきもいヤツとして見ている。

ほんと、ごく普通に、当たり前のようにそう見てる。

小谷は少し黙った。口の筋肉もそのまま、口角もうんと下がっていた。だけど俺には謝ろうという司令がなかった。ここで謝ったら、俺はたぶん小谷が考えている同好会にひきずり込まれる気がしたんだ。正直それは嫌。同じ同好会入ってる。なんて仲良しの代名詞じゃないか。

考えながら目を向けていた物体が机に彫られた、1 - 1 最高！の文字だという事は、やっと考えがおわった時になって気付いた。

「話すら聞いてくれないんだね。」

しばらく黙った後に小谷が言ったことばは、重力に負けて、俺の耳

に届く前にほとんどのポリウムを地球にすいとられたのかと思っ
た。馬鹿でかい声で喋るヤツだから。小谷は少し哀しげで俺が知っ
た二つ目の表情だった。

俺が頭の中でことばを拾い集めようとした時、ちょうどチャイムが
鳴って、小谷はまた前を向いて、かたそうな髪が巻いたつむじを俺
に向けた。新学期なのになぜか制服のブレザーにはたくさんのしわ
があって、明らかに小さい制服に詰まっている。

小谷は俺と同じように座った時白い靴下が見える。それがきもいつ
てゆう悪口を耳に挟んだ事もある。

俺はなんだかんだ言いながらやつぱりきもいんだ。解っているけど、
小谷とは違うと思っていた。

もしも俺が丸縁眼鏡をくもらせたらどうなるだろうと考えたら、あ
まりに小谷の隣がしっくりする男が出来上がった。

寒気がした。俺は違う。俺は違う。少しズボンを引っ張った。

今日一日ただ疲れただけ。

俺はまだ友達ができていない。デザイン科だけあってクラスに男子
は8人しかいない。その中の三人はよく中学の時にからかわれたよ
うな調子乗りタイプ。髪が染め直したような茶色がかりな色で、
長くてホストみたいな上がポリウムがあってえりあしはストレー
トというわけある『イケメン』の王道スタイルって感じ。

大体こういうヤツらがなんでデザイン科にいるんだか。俺はどうせ
ださくてきもいヤツのたまり場なんだろうと思っていたから、入学
式の時ヤツらを見て、一気に高校が6年間に伸びるような気がした。
楽しくない時間は驚くほどながい。

ほかは、仲良し二人で受験して受かりました。オーラむんむんの普通の二人組。髪は短めで眉毛だけ少しいじってあるどこにでもいるヤツ。

あとは、色が白く青ざめたような肌色をした背の低い天然パーマのヤツ。

きもいと呼ばれている中学時代が頭にすぐ浮かぶくらいの見た目。絶対に話しかけたくないタイプだ。

8 - 3 - 2 - 1 〓 2

あまりは俺と小谷。

帰り道、簡単な式を何度も繰り返した。

やばい。

誰もいない。

調子乗りグループに入る勇氣なんて一グラムもない。

仲良し二人組に割り込む勇氣なんて一パーセントもない。

天然パーマの貧弱野郎と友達になるなんて勇氣どころか望みもしない。

小谷なんて論外だ。

不安に穴が開いた心に花粉を運ぶ風が吹き抜けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5415a/>

黒いりんご

2011年1月1日02時05分発行